

会報



◇史学会総報

奈良大学史学会の第五回総会は、五月三十日(土)六〇一教室で開かれ、岡本和美学生委員の司会で、一九八六年度の事業、会計、会計監査の各報告が滞りなく行なわれた。ついで一九八七年度の役員人事案、事業計画案(「奈良史学」発行、会報発行、現地見学会、卒論中間報告会、学内の教員による講演会等)と、それに伴う予算案が提案され、それぞれ原案どおり承認された。

一九八七年度の役員は次のとおり。

▽会長 水野柳太郎 副会長 菅野 正

▽教員委員(監事) 松山 宏 堀内一徳

(編集) 明石岩雄

(庶務) 青木芳夫 森田憲司

(会計) 鎌田道隆

▽学生委員

田村充(代表)、山田浩之 中原康 西川輝之 守田勝豊

山口富生 西村弥生 山田由加子(以上総務)、津田真希

小磯郁子 岡本和美 岡昌英(以上広報)、阿部顕介 長谷川清 柴垣百合 元安今日子(以上編集)、桃木雅代 西村真理子 竹島陽子 大島一友(以上会計)、千住清子 近藤順 今井睦美 松葉勝司 森貴寛(以上渉外)、永松千京 安江恵美子(以上書記)

◇春季講演会

五月三十日(土)、史学会総会にひき続き、例年の通り、奈良大学史学科・史学会共催による特別講義が、左記のように行なわれた。

京都教育大学助教 和田 萃氏

飛鳥のチマタをめぐる

北京大学歴史系副教授 王 晓 秋氏

(通訳 辻田順一氏)

近代中日文化交流的歴史と特点

◇現地見学会

史学会野外活動として、十月十七日(土)に山の辺の道見学会を行なう予定であったが、台風が接近したため、やむなく中止となった。

◇青垣祭参加報告

宝来キャンパスも今年度限りということで、史学会は初

めて青垣祭に参加した。中日文化交流というテーマにより、映画「天平の躑」の上映と学生委員による研究発表を行なった。研究発表については、少ないながらも熱心に耳を傾ける学生がみられた。また、映画上映では、天平の時代を生きぬいた人々の苦勞やきびしさを改めて考えさせられ、多くの感銘をうけた。手続きや準備等とまどうこともあったが、史学会としては大きな一歩を踏みだせたのではないかと思う。

◇卒論中間報告会

十一月七日と十四日の両土曜日に、卒論中間報告会が行なわれた。今回もすべてのゼミから報告者が出て、熱心な学生が多数あつまり、熱のこもった報告・討論が行なわれた。

◇「史学会会報」等の発行

創刊以来「会報」は、史学会の活動の普及と史学科教員・学生間の親睦を深めることを目的としてきたが、本年度は、第七・八号を発行、史学会行事の案内、「先生紹介」「ゼミ紹介」等のほか、教員と学生によるコラムを中心とした内容である。

また、昨年度にひきつづき小冊子「歴史学への扉」を発

行、一・二年次生を対象とした参考図書で紹介で、教員と学生委員の共同執筆による充実した内容となった。

昭和六十一年度史学科卒業論文

〔考古〕

大和高原に於ける村墓の構造的研究所

—奈良県天理市山田町を試例として—

小宮 康弘

人面墨描土器の研究

齋藤 智美

人物埴輪の研究

白石 由香

石切場の研究

山口 格

—播磨・竜山—

俊乘房重源とその遺跡

山本 浩司

〔日本史〕

長屋王論

井口 勝啓

奈良時代末期の藤原氏

伊沢 理紀

七世紀の戸籍について

浦邊 路子

—一六年一造をめぐって—

「不改常典」考

江見 信彦

奈良時代の施薬院

岡島有紀子

律令政治体制の展開

梶野 明子

— 知太政官事・参議を中心に —

雑戸について

— 雑戸籍をめぐって —

「平城遷都論」

孝謙・称徳朝の後宮

— 孝謙・淳仁・称徳三朝における女官の動向 —

光明立后について

遷都遷宮論

天武・持統朝の服制について

編戸に関する一考察

紫微中台について

阿倍内親王の立太子について

長岡京遷都に関する一考察

— 藤原種継暗殺事件について —

律令国家における地方支配

— 大宝令にみられる郡司の性格 —

藤原仲麻呂政権の一考察

古代社会の姓とその構成について

— 金石文から見たカバネ —

光仁天皇即位に関する一試論

奈良時代における浮浪と逃亡

奈良時代の八幡神

— その中央進出を中心として —

中衛府について

— 授刀舎人寮の発展形態としての側面からの一考察 —

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

中世に於ける製塩と輸送

— 瀬戸内海を中心にして —

室町期における庭園史

— 京都龍安寺石庭作者について —

東山文化

— 社会的背景から見た立花の成立 —

中世武士の生活

— 鎌倉時代を中心にして —

源家三代と中世武遊芸

鎌倉前期の千葉氏

中世の遊女について

鎌倉時代の女性の所領相続について

— 三世紀の女性の地位 —

小早川氏の相続について

中世の悪党について

越後城氏の興亡

矢野 昌子

山下 尚幸

赤嶺 浩司

石原 敏彦

岩切 祐子

岩谷 智湖

浦川 好史

遠藤 聡

加藤 千幸

後藤 彰子

芝山 京子

正多 孝幸

須貝 充

—城長茂を追って—

北条政子について

—吾妻鏡に見るその実像と虚像—

熊野詣

—盛行を極めた鎌倉期を中心として—

一休宗純

—その歴史的存在意識—

守護領国制の展開

—南北朝期における少式頼尚の管国支配—

執権政治の変遷

—得宗専制の確立—

☆ ☆ ☆ ☆

堺の近世都市化についての一考察

近世伊賀国における無足人の農民支配について

近世後半期における特権商人について

—奈良商商人を中心に—

「世事見聞録」を通して見た近世後期の都市民について

江戸時代中期の京都における部落差別の変質

—「諸式留帳」にみる六条村を中心として—

奈良奉行の町方支配について

西村 典子

浜口 和子

普川 佳明

宮添 克己

安居 弘晃

赤坂 良人

五百雀 豊

今井 吉則

金田 昇

河口 健児

木村 誠司

江戸時代における歌舞伎役者の身分意識について

木本 洋

江戸幕府開幕期における武士と民衆の動向

後藤津留美

—かぶき者と京都の町を通じて—

近世美濃国大垣藩戸田領に於ける治水政策

鈴木 昇

—輪中の地域性と藩法典『定帳』を中心に—

近世竜野城下の町政機構と醸造業について

竹田 淳子

惣村の研究

友松 兼治

—近江国今掘郷を中心として—

大坂における享保改革

中村 美樹

—国分けをめぐる—

京都・高瀬川の水運について

西川 和穂

—開削とその後—

近世後期における時勢的交通形態の研究

樋口 肇

近世前期における町年寄の成立と町共同体の動向について

広瀬 毅

幕藩体制確立期における

藤井智恵子

「鎖国」政策をめぐる

—「鎖国」政策による徳川の国づくりの歪み—

近世後期河内国の木綿流通と在郷商人

増山 陽史

近世における特産商品の流通について

南 哲也

正徳期の「諸事日記」からみた都市・京都

山下 英子

— 家出人についての一考察を中心に —

近世末期の民衆運動 “ええじゃないか” について

吉村まゆね

大塩平八郎の乱の与えた社会的影響について

渡辺 洋

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

軍部の国民統合政策における半官製諸団体の位置

青木 孝式

戦時期における文学者の戦争協力

岩見 千鶴

— 日本文学報国会を中心に —

戦時下の国民

上田 博之

奈良県における改善運動の開始

大形 利裕

— 矯風会活動を中心に —

満州事変期における奈良県下の民衆動員について

岡 孝憲

幕末の志士を観る

小竹 宏司

— 幕末の志士の特質と志士の活動を中心に —

太平洋戦争における戦争見通し

小松 達也

日露戦後経営

斎藤 淳一

— 満州における支配権の確立をおいて —

明治初年における農民暴動の形態と意義

島 宣之

— 伊勢暴動を題材に —

新制中学校発足と収容状況

杉谷 聡美

日中戦争期の新聞統制

仏教者の戦時下抵抗

明治初期における脱亜意識の形成と構造

— 自由民権派の対韓意識を中心に —

満州事変前後の世論動向について

— 一九三一年の新聞分析を中心に —

大正期の出版物とその取締り

大阪における戦時下の国民生活

一九三〇年代における対満移民政策

戦時下における新聞広告

〔東洋史〕

秦漢の受命改制について

前漢時代の商賈と経済政策について

古代中国の王朝と天命について

党錮の禁と人物評価

唐代の交通について

— 唐代の駅制 —

和蕃公主について

高麗末李朝初期に於ける倭寇対策

竹貞 洋志

大東 仁

中島 篤郎

深町 和美

藤井 敏成

牧 薫子

宮本 謙一

山本めぐみ

安藤 修

菊田美智子

徳永 牧子

二ノ丸淳子

林 賢治

葉 敦子

吉田 泰弘

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

上海における列国の特殊権益

—租界における行政権の拡大—

柿本 美子

清代における科挙

後藤 晃

中英関係の近代化について

鹿田 尚宏

明朝初期文臣官僚について

鈴木 正男

国民革命について

平田 哲也

—農民と革命勢力の結びつき—

清朝に於ける漢民族支配について

宮岡 純一

〔西洋史〕

イクゥエンニアテンの宗教改革

上野 好恵

ローマにおける奴隷制社会論について

尾崎 育美

アテネ帝国における生活と女性

勝山久美子

古代エジプトの建築

鈴木 英恵

—墳墓と葬祭殿—

古代エジプトの不死の信仰と埋葬慣習

高山 敦子

西アジアにおける動物意匠と聖樹信仰について

中山 勝代

古代ローマ発展における地中海の意義・役割

松原 康二

☆ ☆ ☆ ☆

十字軍の変遷

高田 吉洋

イクゥエンニアテンの「宗教改革」

新夕 陽子

☆ ☆ ☆ ☆

ナチズムの興隆と農業問題

中村真沙美

イスパノアメリカの征服と宗教問題

宮地加奈子

—アンデス社会の民間信仰を中心に—

戦後ヨーロッパの国際統合運動

渡辺 英明

受贈雑誌及び図書(自一九八六年十一月)

資料館紀要(京都府立総合資料館)第一四、五号

広島大学東洋史研究室報告(広島大学文学部東洋史談話会)

第八、九号

史学(三田史学会)第五六卷第三、四号、第五七卷第一、

二号

史艸(日本女子大学史学会)第二七号

アカデミア(南山大学)人文・社会科学編第四四、六号

信大史学(信大史学会)第一一号

東洋文化学科年報(追手門学院大学文学部東洋文化学科)

第一号

民具マンスリー(神奈川大学常民文化研究所)第九卷七、

日本常民文化紀要（成城大学大学院文学研究科）第一三輯

日本仏教史学（日本仏教史学会）第二一〇号

東北大学日本思想史研究（東北大学文学部日本思想史学研

究室）第一九号

人文論集（静岡大学人文学部）第三五～三七号

琉球史学（琉球大学史学会）第一〇～一四号

法政史学（法政大学史学会）第三九号

日本文化史研究（帝塚山短期大学日本文化史学会）第八号

明代史研究（明代史研究会）第一五号

群馬県行政文書簿冊目録（群馬県・群馬県教育委員会）第

三集昭和戦前期行政文書篇、第四集明治期地図篇

龍谷史壇（龍谷大学史学会）第八九号

桜井史談会の歩み（桜井史談会）

白山史学（東洋大学白山史学会）第二三三号

東洋大学文学部紀要第四〇集 史学科編Ⅺ

中国水利史研究（中国水利史研究会）第一六号

中央史学（中央史学会）第一〇号

丹波国大山荘現況調査報告Ⅲ（西紀・丹南町教育委員会）

写真で見る暮しと風景（精華町）

應陵史学（仏教大学歴史研究所）第一一、一二号

漢学研究通訊（漢学研究資料及服務中心）第六卷第二、三

期

年報中世史研究（中世史研究会）第二二号

京都市歴史資料館紀要 第四号

海南史学（高知海南史学会）第二五号

お茶の水史学（お茶の水女子大学読史会）第三〇号

兵庫県の歴史（兵庫県史編集専門委員会）第二三三号

香川史学（香川歴史学会）第一六号

北大史学（北大史学会）第二七号

皇学館史学（皇学館大学史学会）第二号

歴史人類（筑波大学歴史・人類学系）第一五号

史聚（駒沢大学大学院史学古代史部会）第二二二号

中世越後の歴史（花ヶ前盛明著）

上杉謙信と春日山城（花ヶ前盛明著）

二松学舎大学論集 昭和六十一年度

二松学舎大学東洋学研究所集刊 第一七集

二松（二松学舎大学大学院文学研究科）第一号

徳川林政史研究所研究紀要 昭和六一年度

帝京史学（帝京大学文学部史学科）第二号

神戸大学史学年報（神戸大学史学研究会）第二号

史官址、西安泊

三月十四日 西安から洛陽へ、洛陽泊

三月十五日 洛陽（龍門石窟、関林、洛陽博物館）、夜行

列車で上海へ

三月十六日 上海泊

三月十七日 上海（豫園）から大阪へ

今回の中国旅行には、三二名の学生が参加したが、史跡の見学はもとより、積極的に現地の人々との交流を計る者もいるなど、昨年にも増して成果があった。なお、八八年春の第三回研修旅行も実施が決定している。

◇会員動向

○守山記生氏（西洋前近代史担当）は、奈良大学教員国外研究として、ヨーロッパ中世都市の研究のため、一九八七年四月一日から一九八八年三月三十一日までの予定で、ベルギーに滞在中である。

○松山 宏氏（日本中世史担当）は今夏、北部フランスにのこる十一、二世紀のコミュニン都市六ヶ所を、調査のため歴訪した。

○森田憲司氏（東洋前近代史担当）は、文化財学科の水野正好氏の民間信仰関係資料調査に協力のため、一月五日か

ら十二日まで、台湾の台北・台南・鹿港の各地を旅行し、成果をあげた。

編集後記

第五号をお届けします。来年の一月にはいよいよ新学舎へ移転いたしますので、現在のキャンパスから発行するのはこの号が最後となります。大学の跡地はシルクロード博の駐車場に利用されるとのこと、文字通り跡かたもなくなるのだそうで、ちょっと寂しい気もします。

◇堀池先生には御多忙中、無理をお願いして玉稿をいただきました。また、東洋史関係では菅野先生の御紹介で北京大学の王曉秋先生に近代日中関係の論文を本誌に寄せていただきました。

青木先生の論文は、先生のペル
ー研究の最初の
成果です。他に
卒業生の論文を
掲載しました。
あわせて御賞味
下さい。（I生）

奈良史学 第五号

一九八七年十二月発行

奈良市宝来町二二三〇

奈良大学文学部内

発行者 奈良大学史学会

会長 水野柳太郎

電話（吉）四一―二五―（代）

振替 大阪九―三一五九四九番

印刷所 （有）藝林美術出版社